

ハインリヒ・ロムバッハにおける構造思想の展開

教職開発コース 古市直樹

The evolution of structural thought in Heinrich Rombach

Naoki FURUICHI

This paper considers the evolution of structural thought in Heinrich Rombach. He developed the image of communication that underlies his original structural thought “structural ontology” on his new conception “image philosophy” und “hermetics”, but he failed to bring the developed image into his structural thought itself minutely.

目次

はじめに

- 1 構造存在論
- 2 形象哲学
- 3 ヘルメス智
- 4 構造教育学
- 5 残された課題についての一考察

おわりに

はじめに

本稿は、現象学者ハインリヒ・ロムバッハ (Heinrich Rombach) の構造思想の展開に関する論考である。構造存在論 (Strukturontologie), 形象哲学 (Bildphilosophie), ヘルメス智 (Hermetik) という彼の構造思想の3つの契機に焦点を合わせる。

ロムバッハは、ドイツのフライブルク現象学における、フッサール、ハイデガーに続く第三の頂とも称される独創的な現象学者である。ドイツ現象学会の会長を務めるなど、ドイツの現象学において長年中心的な位置を占めてきた人物である。日本をはじめ東アジアの思想や文化にも強い関心をもち、とりわけ、後述のヘルメス智を提唱するようになった1980年前後以降には、日本の京都学派の哲学者との交流も深めた。来日して東京や京都で講演やコロキウムももたれ (1980年)¹⁾、また、辻村公一と大橋良介との共著を公刊している (Rombach u.a. 1981)。

ロムバッハは、ハイデガーの後期思想をもとに構造存在論 (Strukturontologie) という独自の現象学を打ち立てた。しかし、概ね1970年代後半以降、構造存在論の趣旨を徹底すべく、形象哲学 (Bildphilosophie)

という枠組みやそれを主要な媒体としたヘルメス智 (Hermetik) という新たな構想を明らかにする。

構造存在論を補完しようとしたロムバッハのこの試みを把握するには、形象哲学やヘルメス智が、構造存在論にロムバッハがどのような限界を見出したからこそ提唱されたのかを明らかにする必要がある。ロムバッハに関する先行研究では、構造存在論、形象哲学、ヘルメス智という3つの契機をあげて論考しているものはみられる²⁾。しかし、その3つの間の関係を、ロムバッハ自身における構造思想の深化の歴史として明示しているものはない。また、ロムバッハ自身も、構造存在論の到達点と限界とを明瞭に省察してはいない。ロムバッハ自身は上述の3つを基本的に (特に1980年代までは) 別々の論考で扱っており、そのせいもあって、3つの間の関係を明示しているわけではない。

また、ロムバッハは教育学にも造詣が深く³⁾、教育学における自身の構造思想として構造教育学 (Strukturpädagogik) を提唱している。しかし、これまで日本の教育学では、構造教育学をはじめロムバッハの構造思想は、少なくとも、現象学史における彼の位置づけに見合うほどには参照されてこなかった。

ロムバッハの構造教育学における主要論稿は *Pädagogische Anthropologie* (以下1966年論文と略記) と *Phänomenologische Erziehungswissenschaft und Strukturpädagogik* (以下1979年と略記) である。前者の発表年は、ロムバッハが構造存在論を体系的に著した *Strukturontologie* の発表年 (1971年) よりも前、かつ、ロムバッハが哲学史に独自に構造思想史を見出し構造存在論を初めて論じた *Substanz, System, Struktur* (全2巻) の発表年 (1965年, 1966年) とほぼ同時期である。

一方、後者（1979年論文）の発表年は、ロムバツハが自身のヘルメス智を初めて公に発表した日本での講演（1980年）とほぼ同時期である。

構造教育学に関するロムバツハの2篇の論稿の発表年にも示唆されているように、構造教育学の1979年論文には、ロムバツハにおける構造思想の展開が反映されている。特に、構造存在論、形象哲学、ヘルメス智の関係をロムバツハ自身がどう考えていたかが示唆されている。

従って本稿では、構造存在論、形象哲学、ヘルメス智というロムバツハの思想の展開を、最終的に構造教育学の特に1979年論文の検討を着地点として提示する。とりわけ、その展開においてロムバツハが構造思想をどう補完しようとしていたのかということ、そのねらいがどれだけ達成されていたかということ明らかにする。

1 構造存在論

構造存在論は、既に触れた通り、まず *Substanz, System, Struktur*（1965年、1966年）において、西洋の哲学史に外典的に伏在してきた構造思想として見出される。そしてその後 *Strukturontologie*（1971年）では、ロムバツハ自身の思想として体系的に論じられる。

西洋の哲学史において構造思想史をなしてきた思想家としてロムバツハが取り上げる人物は極めて多岐にわたる。パスカルやライプニッツにおいて一応の「純粋な構造存在論」に至るとされているが（*Substanz, System, Struktur* 第2巻）、そこに至るまでには、「教科書的な」西洋哲学史には登場しないような、あまり有名でない人物も数多く登場する。ただ、その中でもロムバツハが、西洋哲学史における確認されうる範囲で最初の構造思想として強調し持論（としての構造存在論）にも援用するのが、中世のクザーヌスの機能主義の思想である。

クザーヌスの思想を援用してロムバツハが構造存在論の趣旨として打ち出すのは、同一性と差異性という二項対立の概念そのものを解消することである。即ち、これらの二項対立を前提とする弁証法的統一よりも根本的な動態性として構造を考える。二項対立を、イデア性に依拠して統一というイメージにおいて克服しようとするよりも、流転する万物としての自然のイメージ（ソクラテス以前の自然観）へと解消することにより、「生き生きした構造」を考える⁴⁾。同一性と差異性との対立の克服や、まして同一性と差異性

との統一が問題なのではなく、全てを、よって、同一性と差異性との対立が克服されている（とみなせる）かや同一性と差異性とが統一されている（とみなせる）かを、自然の成り行きとしての構造生成に任せ⁵⁾⁶⁾。

ロムバツハのこうした構造存在論は、中期ハイデガーにおける原存在の思想、後期ハイデガーにおける性起の思想とは、或る面では共通していると推察されるものである。ただ、*Phänomenologie des gegenwärtigen Bewusstseins*（1980年）ではロムバツハ自身は、統一性と差異との区別がもはや手を伸ばし入れられないような基礎への運動態を、弁証法的統一を乗り越えるものとしてと同時に、性起の思想を乗り越えるものとして主張している。つまりロムバツハ自身は、構造存在論を、性起の思想の補完という域を超えるものとして提唱しようとしていると考えられる⁷⁾。

性起とは、存在そのものの現出する場、存在そのものの源泉であるが、存在歴史の本質であり、そこでは共属関係と自性が、絶えざる脱性起（*Enteignis*）により差異が生み出され続ける中でもたらされている。ロムバツハはこのことを、存在論的差異と同様で同一性や統一性に媒介されたものに過ぎないとして、即ち、やはりまだ差異性と同一性という二項対立を前提としているものとして指摘する（*ebd.chap.2 par.14*）。

一方、差異性と同一性という二項対立の解消（〈部分＝全体〉や〈自己＝全体〉という一枚岩の構造のイメージ）へと向かう構造存在論は、前期ハイデガーにおける存在論的差異（存在者と存在者の存在との差異）をも解消する。一枚岩の構造のイメージに支配されている構造存在論では、差異性と同一性とを個別に認めつつその上で両者の統一を考える、ということとはできない。構造存在論においては徹頭徹尾、よって時間性や歴史（構造の力動性や生成）を組み入れて考えても、〈差異性＝同一性＝構造〉である。そこでは、差異性と同一性について時間的な前後関係や論理的な前後関係を考える理路は備わっていない。従って構造存在論では、存在者の存在、即ち存在者の背後（根拠）を考えるよりも、端的に存在者そのものを、当該の事物と世界との解け合った一枚岩の構造において（として）考える。

但し、構造存在論が自然を尊重することは、構造を自然の成り行きに委ねることにだけでなく、次のことにも表れている。ロムバツハは、端的に素朴に存在する存在者、いや、より形而上学的・イデア的意味合いを避けて言ったところのそれ、即ち、素朴な物を信頼

している⁸⁾。このことは、ロムバッハの思想が構造存在論における一枚岩の構造のイメージにばかり集約されるのではないことを示唆している。

確かに、構造という概念は、ロムバッハの思想において1970年代後半以降も主要な位置を占める。しかし、そこにおける構造のイメージは、構造存在論において描出されていたような一枚岩のものとは限らなくなる。構造存在論における一枚岩の構造のイメージに、新たな契機が加わることにより、新たな構造像が形成される。その新たな契機となるのが、先述の通り、素朴な物であり、構造存在論における一枚岩の構造のイメージには組み込まれず、それ自体として独自に尊重される。

ロムバッハの構造思想におけるこの二重性はそもそも、存在論的差異や存在をではなく存在者そのものをこそ構造として（当該の事物と世界との解け合った一枚岩の構造として）考えるという、構造存在論の先述の基本的立場に示唆されている。しかし更に、以下にみるように、形象哲学を、そして形象哲学を介してヘルメス智を導き出すものでもある。

2 形象哲学

形象哲学を主題としたロムバッハの主要著作は、*Leben des Geistes* (1977年)と、日本における一連の講演の記録『形象は語る』(1982年、大橋良介訳)である。ただ、ロムバッハの多くの著作において形象が挿絵や写真として織り込まれている。

ロムバッハにおいて形象として提示されるものは極めて多岐にわたる。絵画や造形作品の他、お辞儀や握手など風俗習慣として人間の所作に現れる視覚的イメージも扱われる。では、これらが、彼のどのような思想を体現する役目を負っているのか。ロムバッハにおいて形象とはどのような概念で、形象哲学とはどのような趣旨をもっていたのか。

『形象は語る』によると、形象とは、「只一つの事柄が現実全体の根本言表の担い手となるという現象」である(40頁)。しかしこれは殆ど、構造存在論における一枚岩の構造のイメージを同語反復的に換言して表したものである。事実、構造存在論においても、形象は頻繁に提示される。

ただ、構造存在論において形象が頻繁に示されることは、形象という概念そのものが（構造存在論における）構造という概念の換言であることや、形象が構造という概念の具現や例証であることの証左であるだけ

ではない。構造存在論において形象は、構造存在論の趣旨を読者に生き生きと伝えるための手段として扱われるのであり、そのことは、構造存在論で扱われる形象の各々が構造（の具現）であることと同義ではない。

ロムバッハは確かに、先ほど記した引用箇所からもわかるように、形象各々を構造（一枚岩の構造）としてもみなす。しかし、ロムバッハにおいて形象とは、それだけにとどまるものではない。

Welt und Gegenwelt (1983年)では形象は、「自ずと出現した」もの、「自己自身を形作る全て」とされている（『後語』参照）。そこでは人間（「作者」）は、自己自身を物語るものを「再現」する者でしかないとされている。形象がこのようにみなされることからすると、前章で指摘した、ロムバッハにおいて自然の成り行きが殊更に尊重されていることがいっそう際立つ。

すると、形象哲学において形象とは、前章で指摘した、構造存在論の孕む二重性に照らして把握されねばならない。*Welt und Gegenwelt*で示されている方の形象の意味、即ち、構造とは区別されうるものとして形象が独自にもつ意味は、構造存在論における一枚岩の構造のイメージと、そのイメージには組み込まれずに独自に尊重される素朴な物とのうち、後者に相当する。

この、形象が形象として独自にもつ意味からすると、形象哲学とは、ロムバッハにおいて構造がもつ一元的な秩序に取り込まれないものをなんとか現前せしめるための思惟、その意味での、語り得ないことについての哲学、あるいは、語り得ないことによる哲学といえよう。実際、形象哲学を主題とする著書では、美学的な慧眼をもつロムバッハの右脳的な想像力が迸っている。

確かに、あくまでロムバッハ自身においては、構造と形象との違いや関係は曖昧にされたままである。まして、形象哲学によって主張されんとするものの全てが構造存在論に回収されるわけではない。しかし、だからこそ回収される。構造存在論の孕む二重性はそもそも、一枚岩の構造のイメージと、そのイメージには組み込まれずに独自に尊重される素朴な物という、相容れない2つの次元が存することを意味していたからである。そして、ロムバッハにおいて形象や形象哲学とは、（少なくとも構造や構造存在論の場合に比べれば）そのうち特に後者の次元の追究にこそ力点を置く。その点で、構造や構造存在論から区別される。特に、形象哲学は概念による狭義の哲学の限界を乗り越えようとする⁹⁾。だからこそ、構造存在論との整合性

を論理的に示すということはいえていない。

しかし、構造存在論と形象哲学とが別次元に存するとはいえ、そして、概念による狭義の哲学を乗り越えようとする形象哲学においては構造存在論との違いや関係を語り得ないとはいえ、構造思想そのものを、形象哲学において炙り出される諸々の現実と導かれて再考することは可能であろう。形象哲学において曖昧かつ強烈に押し出される、言葉にならない形象からのメッセージを感得していたロムバッハにおいては、構造思想にどのような深化がありえたか。

ロムバッハの構造思想は、形象哲学を通じて、まず構造（一枚岩の構造）の〈外〉へといっそう眼を向けるようになったと考えられる。それから、構造（一枚岩の構造）の〈内〉と〈外〉との関係を構造論的に解明するという新たな課題に出くわしたはずである。

この、構造の〈内〉と〈外〉との構造論的な差異および関係を、ロムバッハは具体的にはどうイメージしようとしていたのか。そのことを明らかにするための手がかりになるのが、ヘルメス智である。

3 ヘルメス智

ロムバッハの根本的な主題は、広義のコミュニケーション論である。会話や異文化間（異世界間）コミュニケーションの解明を主眼とした。その点で、ロムバッハの思想はハイデガーの存在思想とは対照的である。とはいえロムバッハは、相互理解の根本的不可能性を洞察している¹⁰⁾。その意味では、文化の差異よりも根本的な差異、即ち世界の差異、次元の差異を洞察していた。

コミュニケーション論としての性格は構造存在論の著作やそれより前の著作にもみられ、ロムバッハの多くの論考に通底している。しかし、いっそう徹底されたのが、1980年の日本における講演で初めて公にされた、ヘルメス智（Hermetik）の構想においてである¹¹⁾。Welt und Gegenwelt（1983年）やDer kommende Gott（1991年）がヘルメス智の主著である¹²⁾。

ヘルメス智は、ヨーロッパの合理的・主知主義的な（「アポロンのな」）知を批判する。ヘルメス智においてロムバッハが批判するのは、世界が、ヨーロッパ的な知においては、解釈学（Hermeneutik）に象徴されるように、形而上学的な唯一の世界として考えられている、という点である。そしてヘルメス智は、時間的にも空間的にも、多元的に様々な「一つの世界」が輻輳しているというイメージを提起する。

根本的には相容れない様々な世界が輻輳している有様を考えるこのヘルメス智は、構造（一枚岩の構造）の〈内〉と〈外〉との構造論的な差異および関係（前章参照）の、ロムバッハなりのイメージである。ロムバッハは、構造の〈外〉、構造の〈内〉と〈外〉との構造論的な差異および関係を、コミュニケーションそのものとして考えようとしていたのであり、多様な構造（多様な一枚岩の構造、多様な「構造としての世界」¹³⁾）が輻輳することとしてコミュニケーションを考えようとしていた。そしてこの、コミュニケーションとしての〈外〉を考えるために、形象が手がかりにされた。つまり、ヘルメス智もまずは形象哲学として展開された¹⁴⁾。

或る一枚岩の構造には取り込まれ得ない〈外〉、或る一枚岩の構造のなす一元的な秩序からは語り得ず形象哲学に依拠する他ない〈外〉が、どのようにコミュニケーションの場をなしているのか。そうした〈外〉と〈内〉（当該の一枚岩の構造）との差異や関係が、コミュニケーションとして、多様な構造（多様な一枚岩の構造、多様な「構造としての世界」）の輻輳であるというのは、どういうことか。より簡潔に言うとは、コミュニケーションとしての〈外〉とは、ロムバッハの構造思想においてどう考えられるものか。そのことを探る上で、構造教育学の論稿が手がかりとなる。

4 構造教育学

構造教育学は、教育的関係（教える者と学ぶ者という関係）を一枚岩の構造の中に解消し¹⁵⁾、人間の自由を構造の「自由」として検討する¹⁶⁾。構造の「自由」は構造存在論における中心的主題でもあり¹⁷⁾、ロムバッハにとって「自由」とは構造に関する概念である。

構造教育学の主要論稿は、本稿の冒頭で示した1966年論文と1979年論文である。この2篇の論文を参照する限り、構造教育学の主張には、ヨーロッパの伝統的な教育人間学に典型的にみられるような（ひいては、ヨーロッパの教育人間学を取り込みながらも京都学派を中心に独自に展開してきた日本の教育人間学にもみられるような）主張と重複するものも多い¹⁸⁾¹⁹⁾。ただ、構造教育学の特徴は、やはりロムバッハの構造思想としての論考であるという点にある。

1966年論文では、Strukturontologieを先取りして、構造存在論における一枚岩の構造のイメージに基づき（生＝教育＝人間＝構造²⁰⁾）、いわば構造が擬人化されて人間の自由について検討されている²¹⁾。構造存在

論において「自由」とは構造に関する概念であるが、一枚岩の構造のイメージゆえに、(構造生成=自己生成)という観点から、構造の「自由」を人間の自由としても考える²²⁾。

確かに、人間を構造として捉えることもできよう。しかし、人間をとりまく或る全体を構造として考えるとどうか。すると、構造の「自由」(全体の自由)を人間の自由と同一視する一枚岩の構造のイメージが、人間の自由そのものに迫りえていないということは明らかであろう。

ロムバッハにおいて、人間をとりまく全体として考えられるのは、特に社会(教える人と学ぶ人との関係やそれをとりまく任意の社会全体)である。このことは、1979年論文でいっそう明瞭になる²³⁾。

本稿の冒頭でも述べたように、1979年前後は、形象哲学やそれを介したヘルメス智の構想が提唱された時期である。前章で述べたようにヘルメス智は、構造(一枚岩の構造)の〈内〉と〈外〉との構造論的な差異および関係を、根本的には相容れない様々な世界が輻輳している有様としてイメージする。多様な構造(多様な一枚岩の構造、多様な「構造としての世界」)が輻輳することとしてコミュニケーションを考える。

しかし構造教育学においては、1966年論文においては勿論だが、1979年論文においてもなお、〈人間=社会=構造〉というように考えられている²⁴⁾²⁵⁾。即ち、一枚岩の構造のイメージに基づいて論じられている。このことは、ヘルメス智におけるコミュニケーションのイメージが、構造教育学における構造思想、構造教育学における社会のイメージに反映されていないことを示している²⁶⁾。構造を一枚岩の構造としてばかり考えるせいでロムバッハは、構造(一枚岩の構造)の〈外〉を、コミュニケーションとして構造論的に解明することができず、結局、コミュニケーションをすらも、平板な一枚岩の構造のイメージの〈内〉へと取り込んでいる。一枚岩の構造の生成過程において一枚岩の構造の〈内〉にそのつど生ずるもの(としての〈外〉)に過ぎなくなる。

では、構造教育学における社会のイメージが孕む上述の問題を、ヘルメス智におけるコミュニケーションのイメージを手がかりに、構造論的にどう克服してゆけるか。次章では、若干の考察によりその方向性を導出する。今一度、構造教育学の1979年論文を取り上げる。ロムバッハはこの論文で、構造と人間との関係を、「構造としての人間」と「構造における人間」という2つの観点から論ずる。

5 残された課題についての一考察

「構造としての人間」とは、構造として捉えられた人間のことである。ここでは、対象としての人間を構造として捉えるのであり、当該の人間自身に現れる構造のことを扱っているのではない。あるいは、前者に後者を混同させて議論している²⁷⁾。

また、「構造における人間」とは、捉えられた或る構造における一契機としての人間のことである。よって、まずやはり、当該の人間自身に現れる内容を直接際立たせて言っているのではない。かつ、ここでロムバッハは構造を社会(〈人間=社会=構造〉)のこととして考えていたのであった。複数の人間の個々を契機とした、一枚岩の構造としてのみ社会をみる。人間と社会との関係を、一枚岩の構造における〈部分=全体〉の関係としてのみみる。

ここでは、各部分としての個々の人間自身にどう現実が立ち現れているかは度外視されている。或る構造が社会としての構造やコミュニケーションとしての構造たるには、当該構造の契機に必ず含まれている個々の「人間」が、構造の単なる一契機ではなくあくまで「人間」でなければならない。当該の契機が「人間」たるには、そこに独自に現実が立ち現れているとみなされなければならない。その独自の現実をも構造とみなすとしても、それは、その人間が一契機をなしているところの社会構造とは別物である。

社会やコミュニケーションを考えるには、こうしてまず、具体的な或る人²⁸⁾自身における現れの内容を考慮する必要がある(そうしないと、人がいることにならない)。ロムバッハの言う「構造としての人間」はあくまで、知能や才能など、人間をどう捉えるかという観点から考えられたものである(Rombach 1979, S. 141-143)。これを、当該の或る人自身における現れの内容(としての構造)へと、即ちその意味で、外から見た構造ではなく内側に現れている構造へと、翻案しなければならない。

更に厳密に言うならば、具体的な或る時の或る人自身における現れの内容を考慮する必要がある。或る時の或る人における現れの内容は、別の或る時のその人における現れの内容とは別物であり、その意味で、或る時の或る人と別の或る時のその人とは別人であり、互いに他者だからである(他者論において、時間性を考慮することは不可欠である)。

そして、「その人」かどうかも恣意的・相対的な同定しだいであることまで踏まえれば、或る時の或る人

と別の或る時のその人との差異は、或る時の或る人と別の或る時の或る人との差異の全般との見境を失う。更に、時が別か同じかも恣意的・相対的な違いであるということまで踏まえれば、結局、複数の人間とは、簡潔に、〈或る時の或る人〉と別の〈或る時の或る人〉(との差異)としてしか考えようがなくなる。

このことに基づくと、社会やコミュニケーションは次のようなものとして考えられる。即ち、〈或る時の或る人〉自身への現れの内容と、別の〈或る時の或る人〉に捉えられた「〈或る時の或る人〉への現れの内容」との差異が多様に折り重なり、かつその折り重なりが生々流転してゆく、というところの全体としてである。

社会やましてコミュニケーションは、ヘルメス智におけるコミュニケーションのイメージに即して、上記のような次元の差異の輻輳として考えられる。このことを踏まえると、先ほどの、ロムバッハの「構造における人間」というイメージやそこで「構造」として言われているところの社会のイメージは、いっそう批判されることになる。まず、〈或る時の或る人〉自身への現れの内容(としての構造)と、それを別の〈或る時の或る人〉が(構造として)捉えたものとしての「〈或る時の或る人〉への現れの内容」との差異が踏まえられねばならない。また、「(或る時の)或る人が生きている世界」が考えられたとしても、そして、それが構造²⁹⁾として考えられたとしても、あくまで、ロムバッハの考えるような社会構造(素朴に実在するかのように措定された単一の社会構造)とは別物であり、やはり「〈或る時の或る人〉への現れの内容」の一種または一部に過ぎない。ということは、メタレベルでまた、それを別の〈或る時の或る人〉が(構造として)捉えたものとしての「〈或る時の或る人〉への現れの内容」がありうることになる。

確かに、社会そのものやコミュニケーションそのものも、「〈或る時の或る人〉への現れの内容」の一種または一部である。しかし、中でも特に、「全体」としての社会(社会的関係)や、まして、「全体」としてのコミュニケーションは、上述のように、幾重にもなりうる折り重なりや、その折り重なりが生々流転してゆくことの全体としてまで考えることができる。ロムバッハは、構造(一枚岩の構造)としてばかり考えるせいで、構造(一枚岩の構造)の〈外〉を、コミュニケーションとして構造論的に解明することができず、結局、コミュニケーションをすらも、平板な一枚岩の構造のイメージの〈内〉へと回収し矮小化している。

おわりに

本稿では、構造存在論、形象哲学、ヘルメス智というロムバッハの思想の展開を提示し、その展開においてロムバッハが企図していた自身の構造思想の補完をロムバッハ自身がどれだけ達成できていたかということ、構造教育学の検討を通じて吟味した。ロムバッハは、構造存在論の中では窮屈であった自身の思い描くコミュニケーションのイメージを、形象哲学やヘルメス智によって生き生きと描出しようとしたが、そうした試みを経てもなお、構造思想そのものとして緻密に論理的に示すことまではできていなかった。

ただ、この点に関して今後検討すべきロムバッハの主要な概念として、共同創造性(Konkreativität)というものがある。この概念は、ヘルメス智を経た構造思想において、コミュニケーションのイメージを表すものとして扱われる。ひとまず本稿では、ロムバッハが自身の思い描くコミュニケーションのイメージを構造思想として提示することができていなかったと結論づけた。しかし、この結論は、共同創造性の検討を通じて吟味し直す必要がある。第5章で提示したコミュニケーションのイメージと、共同創造性についての論考とを比較検討する必要がある。他日を期したい。

注

- 1) 日本におけるその一連の講演の記録が、『形象は語る』(1982年)である。
- 2) z.B. Blaschek-Hahn u. Sepp (Egg.) 2010
- 3) ロムバッハは *Wörterbuch der Pädagogik* (全3巻 1977年)の主要編著者である。
- 4) 構造存在論のもつ一枚岩の構造のイメージにおいては、アプリオリなものは何も考えられない。構造は当該構造自身の他の何もものにも規定されない。その意味で、構造存在論では構造の「自由」が主張されており、この徹底的な「自由」をもつという点で構造は、ロムバッハにおいて、システムとは区別される。例えば、ロムバッハは、ヘーゲルの思想(イデア性に依拠した弁証法的統一の思想)をシステム思想とみなす。また例えば、構造思想(構造教育学)を因果性の思想から峻別しようとする(Rombach 1979, S. 149)。
こうして、ロムバッハは「自由」を、構造の本質として主張し、システムとの対比を通じて際立たせる。但しロムバッハは、構造のもつものとしての(つまり擬人的な意味での)「自由」を、人間の自由と一緒に考えている(本文で後述)。このことや、そもそも、構造を規定するものは当該構造自身の他にはないという見解は、ロムバッハが一枚岩の構造のイメージに徹頭徹尾支配されているということを露呈している。一枚岩の構造のイメージについては本稿では、本文の後述で批判的に言及してゆく。

- 5) 便宜上、あえて乱暴に、いわゆる「ポスト構造主義」なるものが差異の思想であると仮定すれば、ロムバッハにおける構造のイメージはそれとは次の点で対照的である。ロムバッハからすると、差異の思想を徹底するには差異そのものも考えてはならない。差異を考えることは、差異と対をなす同一性（や統一）をも考えざるを得ないことを意味するからである。「…を捉えている」というメタレベルを（即ち次元の差異を）考えることが許されるならばそうは言い切れないが、一枚岩の構造のイメージからはそう考えることは許されない。よって、一枚岩の構造のイメージに支配されている限り、差異の思想を徹底するには同一性（や統一）だけでなく差異そのものも考えないようにする必要があると考えられるため、マッチポンプのように一枚岩の構造のイメージへの固執がいつそう強まる。
- 6) 例えば1979年論文（z.B. S. 142f.）では、構造（一枚岩の構造）をもたらしものとして教育学が考えられる（そしてそう考えるのが「構造教育学」である）。
- 7) z.B. Rombach 1979, S. 142 「人間の現存在は、『根源的』でも『本来的』でも決してなく、つまり、究極に妥当な一義性や輪郭化において可能なのでは決してなく、いつでも、歴史上で手はずを整えられ自らを生み出すものとしてのみ可能である。」
ハイデガーにおける、存在の所定の真理ありきの思惟（特に転回期以降の思想）や「本来性／非本来性」という図式（特に前期思想）が批判されているといえる。
- 8) 非現存在的な存在者をも現存在としての存在者と同等に尊重すべきである、という基本的な立場（ハイデガーに対抗するもの）が明示されているロムバッハの論考は多い。例えば、*Die Gegenwart der Philosophie*（1962年）、*Substanz, System, Struktur*（1965, 1966年）、*Strukturontologie*（1971年）、*Die Grundstruktur der menschlichen Kommunikation*（1977年）、*Phänomenologie des gegenwärtigen Bewusstseins*（1980年）、『*形象は語る*』（1982年）、*Welt und Gegenwelt*（1983年）などを参照のこと。そして、ロムバッハの殆どの論考で、そうした立場が少なくとも暗々裏には示されている。
- 9) その必要性は既に、*Die Gegenwart der Philosophie*（1962年）の第24章におけるハイデガー批判において強調されていた。
- 10) z. B. *Die Grundstruktur der menschlichen Kommunikation*, 1977
- 11) コミュニケーション論としての性格は、ロムバッハが1980年代後半以降に構造思想の深化を図る中でいつそう顕著になる。例えば、*Strukturanthropologie*（1987年）や、*Phänomenologie des sozialen Lebens*（1994年）を参照。また、晩年の*Drachenkampf*（1996年）では、1990年代初頭以降のヨーロッパにおける社会的変革や政治的問題の事例や、更には、日本文化についての試論（例えば「住宅用建物の構造分析」）も盛り込まれている。
- 12) なお、前掲の『*形象は語る*』は、ヘルメス智が初めて公表された講演（*Die Hermetik*, 1980年10月4日、於京都大学文学部）の記録（「ヘルメス学」）を取っており、公刊年も*Welt und Gegenwelt*より早い1982年である。
- 13) 『*形象は語る*』においても明示されているように、ロムバッハは、個々の構造（一枚岩の構造）を個々の「構造としての世界」として考える。
- 14) 但し、*Strukturanthropologie*（1987年）では、構造思想の深化を図った論考にヘルメス智が織り込まれている。この著書の精緻な検討は他日を期したい。
- 15) z.B. Rombach 1966b, S. 262
「まだ他者性と自己性との区別ができていないような深みからはじめることは、基本的事象である。そのような根源的な出現は、人間に備わる成り行きではなく、人間の成り行きである。だから、人間の行動の全ての部分現象が結果として常に教育的なアスペクトも伴うということは、—『教育』であるにも関わらず—人間存在自身であり、人間存在と同一なとても基本的なレベルにとどまる。」
- 16) 例えば1966年論文の「自律的な教育学」に関する議論（z.B. S.265）を参照。
- 17) *Strukturontologie*（1971年）にも構造教育学への言及がみられる（S. 258f., 和訳版 256-257頁）。
- 18) 同様のことを、例えば1979年論文でロムバッハ自身も述べている（S.152）。
- 19) 例えば、1966年論文では、「最も中心的で最も根源的な意味における教育は『目標』のカテゴリを含まない」（S. 264）等というように、目標と評価という枠組みをも（一枚岩の構造の中に取り込むという意味で）解消している。このことは、例えば、矢野（2009）が教育人間学を近代教育の「有用性の原理」を克服しようとするものとして考えていることに類似している。
- 20) z.B. Rombach 1966b, S.262f. 「以下で話す予定の教育学の人間学は根本的な人間学であり、それは人間の現実の全領域を規定し、教育的なことを副次的な契機それ自体としてだけ持つ。教育学の人間学が、人間は自身を手に入れ自身の本質に責任を負うという本質的な状況を考慮することによってである。人間存在に属するものは、この試みにしたが、全てについての教育学の人間学の中で話されねばならない。」
ebd. S.264 「教育の定義と解釈は内側から生じなければならない。それは、教育自体に意味と寸法とを与える、教育を通じて構成された地平である。地平は、人間存在や自由や真実の地平である限りでは、その外側からは把握できない。」
ebd. S. 264f. 「生の全ての分野で、教育を自覚した状態が高揚することは、教育の、結果であり原因ではない。少なくとも、人間的なものの現象と同一な教育の結果である。ひょっとしたら、まるで人間の部分現象に居座るかのような教育の、また、まるで、規定の歴史的な事前形成のそれぞれをやりくりするかのような教育の原因でもあるが。」
なお、ここに表れている2種の教育（（生＝教育＝人間＝構造）としての教育と、一般的な意味での教育）の違いは、当該論文の註1（S.265）で、「機能的な」教育と「意図的な」教育との違いと区別され、次のように述べられている。
「その区別は本来、構成された教育の分野のものであって、構成する教育の分野のものではない。これらは、「目標」と「無目標」との区別を超えていると同様にして、「意識的な」と「無意識的な」との相違を超えたところにある。つまり、人が間違っ、範疇的で一義的で理解可能な意味層を乗り越えて曖昧さや無意味さへ進んでしまう、という恐れは尤もである。しかし、……明瞭さの形式の崩壊そのものは、現象のそれ自体の明瞭さの形式の崩壊は伴わない。」
最後の1文には、構造と、具体的な（或る時の或る人）における現れの内容との混同（本稿第5章参照）が表れている。即ちやは

り一枚岩の構造のイメージが表れている。

万物の生成としての構造生成（一枚岩構造の生成）そのものとしてロムバッハの主張する教育においては、教育（近代的教育）に関する諸カテゴリも生成する。機能的／意図的という区分は、予め特定の教育像（「構成された教育」）が前提されていてそれに基づいて考えられるものでしかないということになる。しかし、もし、具体的な（或る時の或る人）における現れの内容が際立たせられるならば、構造生成と共に、機能的か意図的かの区分も考えられ、また、構造生成そのものをロムバッハと同様教育（「構成する教育」）とみなすかどうか（構造生成そのものを教育としてみなすこと）も相対化できる。

- 21) z.B. ebd. S.262 本稿の註における前掲の引用箇所を参照。
そして、構造（万物が契機として取り込まれる一枚岩の構造）を擬人化したイメージに基づき、次のように主張する。「教育者は自分の仕事を、世界観上の、政治上の、そしてイデオロギー上の要求には、つまり例えば、人種的なイデオロギーやメシアニズムや剥き出しの経済志向等には与えない。」(ebd. S. 265)
- 22) ゆえに〈自我＝人間〉とも考えられている (z. B. Rombach 1979, S. 138)。一枚岩の構造には近代的な主観－客観図式も解消されるので、自我もその一枚岩の構造に解消される。換言すれば、その一枚岩の構造そのものとして自我を考えることもできる（例えば小川侃『現象学と構造主義』第 2 章等を参照）。そして結局、〈人間＝構造＝自我〉ということになる。換言すると、〈自我＝人間〉と考えられていることは一枚岩の構造のイメージを露呈しているといえる。
- 23) z.B. Rombach 1979, S. 151
「要するに、歴史的・社会的発想を正当に得て究明する教育学的多元論が、構造教育学に必要とされている (gehören)。」
- 24) z.B. ebd. S.147
「自我－主観性は我々主観性と結びついて、唯一の同一性へと至る。これは、人間の行動 (Verhalten) の目的形式 (Zielform) であるとともに、日常的な実在性 (Realität) でもある。」
- 25) 1979年論文の次の箇所 (S. 146) はこのことに関わっているが、詳細は他日を期したい。
「確かに、「共同体 (Gemeinschaft)」と「社会 (Gesellschaft)」との間に本質的相違はないというのは正しいが、しかしそれは、共同体が結局社会でもあるからではなく、社会が結局共同体としてのみありうるからである。」
- 26) なお、笹田 (2005) は、構造存在論とそこに批判的に継承されたハイデガーの（特に転回期以降の）思想との関係を示した上で、構造存在論に照らして構造教育学について検討している。しかしそこでは、構造教育学を主題としたロムバッハの論稿としては、1966年論文の方のみが重点的に扱われており、1979年論文の方は、冒頭で言及された程度である。そしてそのことにも示唆されているように、笹田の当該論文では、形象哲学やヘルメス智については触れられていない。そのせいもあって、構造教育学のもつ一枚岩の構造のイメージ（〈人間＝社会＝構造〉）を、構造存在論から継承した当然のものとして前提しており、殊更に主題化することや、まして批判的に検討することはしていない。
- 27) z.B. Rombach 1979, S. 144.
- 28) 以下、「或る人」（観察者自身、研究者自身も含む）とは、複数名をひとまとまりに同定した「或る人たち」のことでありうる

ということをこことわっておく。「その人」についても同様。

29) ここでは、〈構造として捉えられた世界〉のことではなく〈世界の構造〉のこと。なお、「構造としての人間」は、〈本人自身に現れている構造〉というロムバッハ自身による含意を取り除いて、〈はたから見た構造〉（構造として捉えられた人間）としてのみ考えられるのであれば、世界（「(或る時の) 或る人が生きている世界」）や、その構造（〈世界の構造〉）に組み込まれていると考えられる。

引用文献

- Blaschek-Hahn, H., Sepp, H. R. (Egg.) *Heinrich Rombach. Strukturontologie – Bildphilosophie – Hermetik.* Würzburg: Königshausen & Neumann, 2010.
- 小川侃『現象学と構造主義：対決と調和』世界書院, 1990.
- Rombach, H. *Die Gegenwart der Philosophie. eine geschichtsphilosophische und philosophiegeschichtliche Studie über den Stand des philosophischen Fragens.* Freiburg/München: Alber, 1962. 篠憲二 訳『哲学の現在』国文社, 1984.
- Rombach, H. *Substanz, System, Struktur. Die Ontologie des Funktionalismus und der philosophische Hintergrund der modernen Wissenschaft.* 2bde. Freiburg/München: K. Alber, 1965/1966a. 酒井潔 訳『実体・体系・構造：機能主義の有論と近代科学の哲学的背景』ミネルヴァ書房, 1999.
- Rombach, H. 1966b. *Pädagogische Anthropologie. Philosophischer Ansatz zum Eeziehungsgeschehen. Rekonstitutionsphilosophie und Strukturpädagogik.* In: Ders. (Hrsg.) *Die Frage nach dem Menschen. Aufriss einer philosophischen Anthropologie : Festschrift für Max Müller zum 60. Geburtstag.* Freiburg/München: K. Alber, S. 261-283.
- Rombach, H. *Strukturontologie. Eine phänomenologie der freiheit.* Freiburg/München: K. Alber, 1971. 中岡成文 訳『存在論の根本問題：構造存在論』晃洋書房, 1983.
- Rombach, H. 1977a. *Die Grundstruktur der menschlichen Kommunikation. Zur kritischen Phänomenologie des Verstehens und Missverstehens.* In: *Mensch, Welt, Verständigung: Perspektiven einer Phänomenologie der Kommunikation (= Phänomenologische Forschungen Bd. 4).* Freiburg/München: Alber, S.19-51. 中山善樹 訳 1979. 「現象学と言語の問題：人間的コミュニケーションの根本構造：理解と誤解の批判的現象学のために」磯江景孜・下村鉄二・中山善樹・安彦一恵・今泉元司 訳『言語哲学の根本問題』晃洋書房 pp. 241-277.
- Rombach, H. *Leben des Geistes. Ein Buch der Bilder zur Fundamentalgeschichte der Menschheit.* Freiburg/Basel/Wien: Herder, 1977b.
- Rombach, H. 1979. *Phänomenologische Erziehungswissenschaft und Strukturpädagogik.* In: Schaller, K. (Hrsg.) *Erziehungswissenschaft der Gegenwart: Prinzipien und perspektiven moderner Pädagogik.* Bochum: Kamp, S. 136-154.
- Rombach, H. *Phänomenologie des gegenwärtigen Bewusstseins.* Freiburg/München: Alber, 1980.
- Rombach, H. *Welt und Gegenwelt. Umdenken über die Wirklichkeit: Die philosophische Hermetik.* Basel: Herder, 1983. 大橋良介・谷村

- 義一 訳『世界と反世界：ヘルメス智の哲学』リプロボート、1987.
- Rombach, H. *Strukturanthropologie. "Der menschliche Mensch"*. Freiburg/München: Alber, 1987.
- Rombach, H. *Der kommende Gott. Hermetik – eine neue Weltsicht*. Freiburg: Rombach Verlag, 1991.
- Rombach, H. *Phänomenologie des sozialen Lebens: Grundzüge einer Phänomenologischen Soziologie*. Freiburg/München: Alber, 1994.
- Rombach, H. *Drachenkampf. der philosophische Hintergrund der blutigen Bürgerkriege*. Freiburg im Breisgau: Rombach Verlag, 1996.
- Rombach, H., Tsujimura, K., Ohashi, R. *Sein und Nichts. Grundbilder westlichen und östlichen Denkens*. Basel/Freiburg/Wien, 1981.
- Rombach, H. (大橋良介 訳)『形象は語る：現象学の新しい段階』創文館, 1982.
- 笹田博通 2005. 「構造としての教育—ロムバッハ『構造教育学』試論」 原研二・佐藤研一・松山雄三・笹田博通 編著『多元的文化の論理：新たな文化学の創生へ向けて』東北大学出版会 pp. 353-370.
- Willmann-Institut (Hrsg.) *Wörterbuch der Pädagogik*. 3Bde. Freiburg: Herder, 1977.
- 矢野智司 2009. 「沸騰する教育人間学への誘い：絶対的な問いの探究は教育人間学に何をもたらすか」『教育哲学研究』100号 pp. 329-343.

(指導教員 藤江康彦准教授)